

身代わり花嫁は俺様御曹司の抱き枕

目次

身代わり花嫁は俺様御曹司の抱き枕

5

番外編 執愛セレブリテイ

237

身代わり花嫁は俺様御曹司の抱き枕

くちゅくちゅと淫らな水音が寝室に響く。

肉厚の舌で舐めしゃぶられた花芽は、まるで誘うように濡れ光っていた。

「ああ……ん、もうだめえ……」

「さつきから、駄目ばかりだな。瑞希」

唇から漏れるのは艶めいた嬌声ばかり。

たまらない悦楽から逃げるように腰をずり上がらせれば、逞しい腕に掴まれて引き戻されてしまふ。

自らの濡れた唇を舌で辿る瑛司は、獐猛な雄の顔を晒した。

「ぐちゃぐちゃに濡れてるな。もう挿れてほしいのか？」

意地悪な男の挑発に、私はぎゅっと目を瞑って首を振る。

愛撫に蕩かされた体は熱を帯びていただけ、彼の思惑通りに陥落したくはなかった。

「濡れてなんかない……」

「そんなことを言うのは、どの口だ。ん？」

激しいキスで唇を塞がれながら、濡れた蜜壺に指を挿し入れられる。

中を掻き回されるたび、ヌチュ、ジュブと淫猥な音色が鳴り響いた。

「んんう、ふ、んくう……っ」

逃げ惑う舌を捌め捕られて、じゅると啜り上げられる。

じん、と頭の奥が甘く痺れた。

淫らな肉褻は呼応するかのよう、擦り上げる指をきゅうつと食い締める。

「あっ……はあ……っ」

ずるりと指を引き抜かれ、塞がれていた唇も解放された。私は口端から唾液を滴らせながら、浅く息をする。

「挿れるぞ」

掠れた低い声音が耳朶をなぞり、甘い喜悦が体を駆け抜ける。

ぐつと熱い先端が濡れた蜜口に押し当てられた。散々愛撫されたそこは極太の楔を呑み込もうと、みだりがましく口を開ける。

「あ、あっ、ああ……」

ズチュンツと濡れた音が鳴り、熱い衝撃が身を貫く。

熱杭は媚肉を舐め上げながら、ずぶずぶと奥まで挿入されていた。

「あ、あ、あっ……おっきい……」

「きゅうきゅうに締めつけてくる。気持ちいいか？」

「ああん……だめえ……」

ズンツ、ズンツと力強く抽挿されて、意識が飛びそうなほどの快感に囚われる。瑛司のものを出し挿れされるたびに、痺れるような愉悅が生まれた。

「ああつ、やあ、そんな、奥まで……ああん、あつん」

雄芯は深く奥を穿ち、ずるりと引き抜いてはまた媚肉を抉る。

じゅぷじゅぷと卑猥な音を立てながら、淫らに塗り替えられた膣内は硬い楔を受け入れ続けた。

「ああ、あつ、あつ……もうっ……」

絶頂の予感が掠め、私はきつく背を反らせる。すると、自ら雄芯を受け入れるように大きく足が開く。

体が熱くてたまらない。激しい腰使いに合わせて、私は淫らに腰をくねらせた。

「奥で出してやる。好きだろう？」

両手で腰を持ち上げられ、深々と男根を突き入れられる。太い雁首が敏感な最奥を、ぐりゅつと抉った。

「ひあつ、ああつ、やあ……あつ、はあ、あん、あつ……ああああんっ……」

どちゅどちゅと剛直で穿たれ、やがて欲望は最奥で弾けた。

濃厚な白濁が、子宮へどんどん注ぎ込まれていく。

体の奥深くで熱い精を受け止めながら達した私は、ひくんと腰を揺らめかせた。

「ああ……ん、はあ……あ……」

出し切るように腰を押しつけ小刻みに揺らした瑛司は、私の体をきつく抱きしめる。

「おまえの体をすべて俺で満たしたいんだ。いいだろう。おまえは、俺の花嫁なのだから」

逞しい腕に包まれた私は、瑛司の精悍な顔をぼんやりと眺めた。

……まさか、こんなことになるとは思っていなかった。

こめかみにくちづけられながら、私はこれまでのことを思い返した。



豪華な調度品の置かれた室内は、一般庶民には居心地の悪いものだ。

小花柄のワンピースを纏った私は、革張りのソファにかしこまって座っていた。

隣の父は落ち着きのない様子で視線を彷徨わせている。

「いいか、瑞希。くれぐれも失礼のないようにな。十和子様には逆らうなよ。なにしろ大島家の大奥様だ。瑛司さんにもだぞ。彼はもう、おまえの幼なじみという立場じゃないんだ。大島グループの御曹司なんだからな」

「わかっているから。お父さん、落ち着いてよ。私ももう二十五歳なんだから、それくらいわきまえてるって」

焦りが滲んで口数の多い父の肩を、私はぼんと叩く。

父が挙動不審なのは無理もないことだ。

ここは、大島家のお屋敷。
かつて華族であった大島家は、戦後に興した会社を急成長させた。今では不動産業や建設業、インテリア家具販売業など幅広く事業を手がける、大島グループの創業家である。
現在は大島義信氏が会長を務めている。義信氏は大企業の会長なので、業界以外でも発言が注目される有名人だ。

そして義信氏の母親である十和子おばあさまに、今から私たちは叱責される。
事の起こりは二十七年前に遡る。

二歳年上の姉の葉月は、生まれたときに大島家の許嫁に指名された。

江戸時代の頃、大島家は格式ある藩主の家柄で、うちの守谷家はその家来だったらしい。両家は親戚でもなんでもないのだけれど、主人と家来という昔の名残で少々の付き合いがあった。
といっても、うちはふつうの家庭で、父は一般的なサラリーマンだ。

それなのに葉月をぜひ許嫁にと指名されて、父も母もそれは驚いたらしい。
相手は大島家の嫡男である、大島瑛司。
姉とは同年だ。

同級生のふたりは物心ついたときから許嫁という関係なわけで、私から見ても仲が良かったように思う。よく私も交えて三人で遊びに出かけていた。

けれど、それも学生のときまで。

姉は高校を卒業した途端、ふらりと海外へ行ってしまった。なんでも発展途上国の子どもたちの

ために学校を建設するのだとか。

その志は立派だと思っただけれど、結婚はどうするのだろうか？

父と母は葉月がすぐに帰ってくるものだと思っていたが、最近になって急に焦りだした。

大島家から、葉月はどうしているのかとお伺いがあったからである。

許嫁である葉月が海外から戻ってこないという噂が、十和子おばあさまの耳に入ったらしい。

元々許嫁の件は十和子おばあさまからの提案だ。大島家に全く顔を見せない葉月に、おばあさまがやきもきするのも無理はない。

ちなみに姉が海外に行ってから、すでに十年近い歳月が経過していた。

初めは時々帰国して、今はアフリカで活動しているなどと報告してきた姉だったが、近頃は音信不通の状態である。

でも、姉は母にだけは生存報告を行っているそうなので、とりあえず元気でやっているらしい。

「どうする、瑞希……。十和子様にも怒られるだろうな。許嫁の件はなかったことになんて言われたら……」

大島家を訪れて事情を説明してほしいという連絡があつてからずっと、父はこの調子だ。

まさか葉月は海外から帰ってこないつもりです、とは言えない。

というより姉が今後どうするつもりなのか、全くわからないのだ。

「大丈夫よ。……たぶん」

「たぶん!? たぶんとはなんだ!?!」

「だから落ち着いてつてば。ちゃんと話せば、十和子おばあさまもわかってくれるよ」

大島家の嫁になれるなんて僥倖だと、両親は昔からとても喜んでいた。

それが破談になるかもしれない……という事態になり、母は寝込んでしまった。頼りない父を放っておけず、私も一緒に大島家を訪れたのだけだ。

室内を見回せば、あまりのお金持ちぶりに気が遠くなる。

高い天井から吊り下げられた煌めくシャンデリア。数十人が腰かけられそうな、いくつもの革張りのソファ。その中央に鎮座する大理石造りのテーブル。足を包み込む緋色の絨毯はふかふかだ。子どもの頃は瑛司とよく遊んでいたから大島家を訪れたことはあるのだけれど、あの頃は遊園地のようなおうちとしか思っていなかった。大人になった今、上流階級との格の違いを嫌でも意識してしまう。

こんなにもお金持ちの大島家から婚約破棄を言い渡されれば、葉月は何か問題でもあるのかと悪い噂が立ってしまい、もう嫁に行けないかもしれない。それに慰謝料はいかほどになるだろうか。父はそれらを心配して蒼白になっている。

やがて、ガチャリ、と扉が開かれた。

私と父は即座にソファから立ち上がり、姿勢を正す。

「十和子様、お久しぶりでございます。このたびはお招きいただきまして、光栄にございます」

お父さん、声が震えてるよ……

きつちり九十度に腰を曲げた父に、入室した十和子おばあさまは穏やかな声をかけた。

「まあ、誠一郎さん。そんなにかしこまらなくてもよろしいのよ。お久しぶりね。それに瑞希さんも、ようこそいらつしやいました」

「お久しぶりです、十和子おばあさま」

久しぶりに会った十和子おばあさまは、相変わらず気品に満ち溢れた美しい人だ。

聞くところによると、十和子おばあさまは元々大島家に生まれたひとり娘で、婿を取ったらしい。ということは本物のお姫様なんだな。

婿の旦那様はすでに亡くなっているんで、私は会ったことはない。

そういう面もあるので、大島家の舵取りは十和子おばあさまが行っているらしい。

そんな十和子おばあさまの後ろから、背の高い男の人が入室してきた。

意志の強そうな眉に、切れ長の双眸。鼻梁はまっすぐで、唇の形は綺麗に整っている。さらに百八センチを超える長身で体格が良く、手足も長い。

絵に描いたような美丈夫だ。

一瞬、誰だろうと思ってしまう。

「瑛司さん、お久しぶりでございます。いやあ、実に精悍な青年になりましたな。海外事業部に在籍されていらつしやるとか。さすがの貫禄ですな」

それを聞いて、彼が幼なじみの瑛司だということがわかった。会うのは十年ぶりくらいだ。わかりやすい褒め言葉を並べる父に、瑛司は口端を上げて苦笑を零す。

「お久しぶりです」

サマースーツをさらりと着こなし、悠々とした足取りを見せる彼の姿は、この豪華な部屋によく似合っている。

けれど、嫌味な笑い方にもさらに拍車がかかった気がする。

彼は昔から、威風堂々としていた。お金持ちで、頭も良く、スポーツ万能というタイプの瑛司に敵う人はいなかったから、周りはそれを許容していた気がする。

そうなれば女子が放っておくはずがなく、授業が終われば瑛司のクラスには女子が詰めかけていた。告白も数え切れないほど受けたんじゃないだろうか。

でも、私は知っている。

このイケメンが吐く毒を……

席に着いた一同の前に、メイドさんが紅茶を出す。

立ち上る湯気、芳しい香り。

緊張している私と父は、とてもじゃないが紅茶のカップに手をつけられない。

十和子おばあさまは優雅な所作で紅茶をひとくち含むと、ふいに訊ねた。

「それで、葉月さんはどうしているのかしら？ 海外に行っているそうだけれど」

直球来ました。

ごくりと息を呑んだ父は、暑くもないのに汗を掻いている。

「ええ、そうなんです。葉月は途上国の子どもたちのために、学校を建設するという事業を行っております」

「まあ、それは素晴らしいことね。それで、葉月さんはいつ、大島家の嫁になってくださるのかしらっ」

「……いつ、でございますか？ 十和子様」

「そうですね。瑛司はもう二十七歳。葉月さんも同い年です。ふたりは生まれたときから許嫁なんですから、そろそろ結婚しても良い頃ではなくて？」

場に痛々しいほどの沈黙が落ちる。

姉がいつ頃日本に戻り、いつ結婚するかなんてことは、全く把握していない。

険しい表情を見せる十和子おばあさまを、父はおそろおそろ見上げては目を伏せる。

そこへ瑛司が柔らかな声で、隣に座る十和子おばあさまに話しかけた。

「おばあさま、葉月はすぐには帰ってこれないのでは？ 俺も海外赴任中に、今すぐに日本に

戻って来いと命じられて困り果てたときは何度もありましたよ」

「そう、そうなのです、瑛司さんの仰る通りです、十和子様！」

瑛司の助け船に、父は緘りつく。

けれど十和子おばあさまが、それだけで納得するはずもない。彼女の眉間には深い憂慮が刻まれている。

十和子おばあさまは、なんとしても姉と瑛司を結婚させたいらしい。

正直、どうして十和子おばあさまが姉の葉月にこだわるのか、私にはわからない。

いくら昔の家来といっても、大島家と比べたら、うちは単なる一般家庭なのだ。

「もう待てません。何十年も、私はふたりの結婚を待ち望んでいたのですからね」
「何十年も……?」

瑛司と姉が許嫁になつてから二十七年経つけれど、何十年とまで言うほどだろうか。首を傾げた私の咬ぎに、十和子おばあさまは軽く咳払いをして、話を進める。

「とにかく、今日はなんらかの結論を出さない限り、誠一郎さんと瑞希さんを帰しませんよ」
「そんな……十和子様……」

泣きそうな父を前に、瑛司は柔和な笑みを浮かべてまた十和子おばあさまに語りかけた。

「では、おばあさま。葉月が戻ってくるまでの間、瑞希を花嫁代理として、花嫁修業させればよろしいではありませんか?」

「ええっ?」

突然名指しされた私は頓狂な声を上げてしまう。

花嫁代理って、どういうこと?

十和子おばあさまも戸惑っているようで、困惑した眼差しを私に向けた。

「瑞希さんを? けれど瑞希さんと瑛司は、年がふたつ違うでしょう」

二歳の年齢差があると、何か重要な問題が生じるとでもいうのだろうか。

職場の人たちとは年齢差があつても会話は弾むし、楽しくコミュニケーションをとっている。二歳差くらいなら同じ年代と言えるので、年齢差として困ることはないように思えた。

「おや。おばあさまは年齢が気になりますか? 亡くなったおじいさまとおばあさまは二歳の年の

差でしたね。とても仲睦まじかった」

瑛司が楽しげに口端を吊り上げて言う。

すると、なぜか十和子おばあさまは視線を彷徨させた。けれどそれもわずかのことで、すぐに瑛司にびしやりと言い放つ。

「亡くなった旦那様のことを持ち出すのは、おやめなさい。わたくしのことはよいのです。瑞希さんでは心許ないというのも、同じ年であるほうがよろしいということを、わたくしが身をもって知っているからなのです」

「なるほど。おばあさまの考えはわかりました。しかし、あくまでも代理ですから、必ずしも年齢を一致させる必要はないではありませんか? それよりも大島家の花嫁として、見過ごすことのできない重要な任務があるでしょう」

瑛司の言葉に、十和子おばあさまは思慮深げに双眸を眇めた。わけのわからない私とお父さんは、ふたりの会話を茫然として見守ることしかできない。

「あのことですね。確かに、あの問題を解消するには、ある程度の時間が必要だわ」

「そうですね。ですから瑞希に花嫁代理を務めさせて、解決法を見出しておかなければなりません。今から始めれば、葉月が戻ってきたときに引き継ぎできるので、葉月自身も戸惑いなく花嫁修業に取り組めるでしょう。わからないことがあれば妹に聞けば良いのですからね」

何やら、大島家の花嫁に課せられた重要な任務というものが存在するらしい。

それはいったい、なんだろう。解決法を見出さなければいけない難しい問題のようだけれど、全

く想像がつかない。

「そうね。結婚してから、あの問題で頓挫したのでは大変だわ。妹である瑞希さんが大島家の嫁になるためにもっとも重要なことを身につけていてくれれば、そのあとも事が運びやすいでしょう。わかりました。瑞希さんに花嫁代理を務めさせることを、認めます」

「ありがとうございます。おばあさま」

瑛司は口元を綻ばせて、十和子おばあさまに頭を下げた。

「ついに私は立ち上がり、声を上げる。」

「ちよっと待ってください！ どうして私が姉さんの代理を務めなくちゃいけないんですか？」

慌てた隣の父に腕を引かれたけれど、勝手に話を進められても困る。

姉の代理になるということは、常に瑛司の傍にいて、花嫁修業を行わなければならない。

誰にも話したことはないけれど、私は……子どもの頃は密かに瑛司に憧れを抱いていた。

でも、姉さんの婚約者なのだから、こんな気持ちを抱いてはいけないと封印した。

微かな恋心は、もう私の胸に残っていないに等しい。

それでも好きになりかけた人の傍にいれば、想いが再燃してしまうのではないかという懸念がある。今日は父の付き添いとして行くだけだと思っただけだから大島家を訪ねたというのに、花嫁代理に指名されるなんて完全な想定外だ。

瑛司は私の反論に対して、鋭い双眸で返してきた。

「理由は今ここで話した通りだ。復唱するか？」

「え……はい」

十和子おばあさまに向けていた穏やかな印象とは違い、有無を言わせない力強さが滲んでいる。

瑛司は凜とした声音で、朗々と述べた。

「大島家の花嫁として果たすべき重要な花嫁修業のため、葉月が戻るまでの間、妹の瑞希を花嫁代理とする。それが両家の繁栄のためだ」

瑛司はもはや当主としての風格を漂わせている。

さすが、お殿様の血を受け継ぐ大島家の御曹司だと賞賛したいところだけれど、まだ私は納得できていない。

「その重要な花嫁修業というのは、何？ 解決するのに時間が必要だそうだけれど……」

「それについては、のちほど俺から説明しよう。些か内輪の話も入るからな。——ところで瑞希を花嫁代理とすること、誠一郎さんはどのようにお考えですか。守谷家は江戸時代から脈々と続く大島家を陰ながら支えてきてくれた、もっとも忠実な家臣。誠一郎さんご自身も、大変誠実で忠義の厚い方だと存じています」

瑛司の鋭い眼光を受け、威圧を察した父は首がもげそうなほど頭を縦に振る。

「もちろん、瑛司さんと十和子様のご意見に賛同いたします。仰ること、ごもつともです。姉が不在の間、妹が代理を務めるのは当然のことでございます。何卒、よろしくお願いいたします！」

「ちよっと、お父さん!？」

驚く私の背を、父はぐいと前へ押し出した。

お父さんつてば、本当に気が弱いんだから！
長いものには巻かれると常日頃から説いている父が、大島家に反論を唱えるなんてできるわけがない。

十和子おばあさまは上品な微笑を浮かべて私に問いかけた。

「瑞希さんはよろしいのかしら？ 瑞希さんが手助けしてくだされば、とても助かるわ。わたくしと瑛司も、そしてもちろん、誠一郎さんと葉月さんもね」

みんなが一斉に私に注目する。視線を集めた私は、頬を引き攣らせた。

よろしいのかしらと言われましても……外堀を埋められてしまったこの状況で、断れるわけがない。

期間限定なわけだし、あくまでも代理ならばどうにかなるだろう。その間、瑛司への想いが再燃しないように気をつけないと。

「はい……ぜひ、花嫁代理として花嫁修業をさせていたきたいです……」

瑛司はにやりと口端を吊り上げる。そうするとまるで結婚詐欺師のようだ。

彼は傲然として、ひとこと言い放った。

「身代わり花嫁、よろしくな。瑞希」

あとは若い者ふたりで、なんてお見合いのような台詞を揚々と吐いた父に追い立てられ、私は瑛司と共に大島家の庭園を散策した。

手入れの行き届いた庭園は、松や樺の大木が見事な枝振りを見せている。庭園内には錦鯉の泳ぐ池があり、朱色の橋が架けられていた。

私はワンピースの裾を翻して、瑛司を振り返る。

「さっきの提案、冗談よね？ 身代わり花嫁だなんて」

瑛司と会話するのは十年ぶりだけれど、つい、昔と同じ口調で話しかけてしまった。敬語のほうが良かったらどうか。

すると男らしい眉をひそめた瑛司は、不遜に口を開く。

「俺は冗談など言わない主義だ。初めから瑞希に身代わり花嫁をやらせるつもりで呼び出した。おまえも了承しただろう。今さらやめるなよ。もつとも、おまえに拒否権はないが」

うわぁ……久しぶりに聞いたなあ、瑛司の俺様節。

お金持ちのイケメンというクオリティを粉碎する、この毒舌。

強引で俺様な彼の性格は、十年経っても変わらないようだ。なんでも自分の思い通りにしないと気が済まないというか、自分の思い通りに世界が動いて然るべきと思っっているみたい。

「相変わらず俺様だね……」

「おまえの評価は不要だ」

十和子おばあさまの前では、優しい穏やかな孫を装っているんだよね。あざとい……

とはいえ、婚約者の葉月が帰ってこない、大島家が困るのは事実だ。その穴を埋めるために、妹の私が花嫁代理を務めるのは理に適っている。まさか他の家のお嬢さんに頼むわけにはいかない。

それに、大島家の花嫁として果たすべき重要な花嫁修業とやらがあるそうだけれど。「さつき十和子おばあさまと話してたことだけど、大島家の花嫁になるには、何か問題を解決しないといけないの?」

「そうだ。極めて重要な問題だからこそ、おまえの力が必要なんだ」

「私にできることなら協力するけど……でもそれって、どんなこと?」

「ついてこい」

踵を返した瑛司は、庭園を抜けて離れの棟へ移動した。

大島家のお屋敷は母屋と離れに分かれている。とても広大な敷地だ。他にもいくつもの別宅を所有しているという。

「子どもの頃、よく離れで遊んだね。瑛司の部屋はここにあったんだよね」

姉と一緒に泊まりに来たことを思い出す。広い子ども部屋にはたくさんのお玩具があって、三人で遊んだ。眠るときは大きなベッドに寝転んで枕投げをしたりして、はしゃいだものだ。

姉さんは枕投げを始めた張本人なのに、うるさくて眠れないと言って、メイドさんに他の部屋を用意させていたっけ。

「今でもそうだ。少しでも物音がすると眠れないから、食事以外は完全にこちらで生活している。

風呂とトイレを増築して、おまえたちが泊まりに来たときよりもさらに広くなっている」

数寄屋造りの壮麗な門をくぐれば、玄関まで御影石が連なっている。

現れた離れの屋敷は由緒正しい日本建築を結晶化した造りで、まるで武家屋敷のような威厳が保

たれていた。

「お邪魔します。わあ……懐かしい。子どもの頃はここが忍者屋敷だと思ってたよ」

「そうだったな。忍者ごっこをして床の間の掛け軸を破った葉月を庇って、俺と瑞希が怒られたんだ」

忘れない思い出が脳裏によみがえる。

姉さんが瑛司のせいだと言って罪を着せようとしたので、私がやりましたと名乗り出たら、なぜか瑛司が「俺がやった!」と大声を上げたのだ。

結局ふたりで大人たちに怒られてしまった。姉さんの、してやったりという得意気な表情は今も忘れられない。

「そんなこともあったね……。私の黒歴史のひとつだよ」

当時から私は姉の身代わりを務めていたんだな。

自由奔放な姉は勝手な振る舞いばかりしているから、くれぐれも大島家に迷惑をかけることのないようにと、私が両親から言い含められていた。尻ぬぐいさせられるのは昔からだし、今回の身代わり花嫁の件も、姉さんの代わりに私がやるしかないんだな……

姉と瑛司が、結婚するまで。

そのことを思い、私の胸は、つきりとした痛みを覚えた。

意識して考えないようにする。ずっと昔から、そういうふうにしてきたのだから。

磨き上げられた廊下を通り、書齋らしき部屋に案内される。

その部屋は壁の全面に書架が設置されて、難しそうな書籍で埋め尽くされていた。他に置かれている家具は重厚な机と椅子のみ。

私は天井まで届いた書架を見上げた。

この本、全部読んだのかな。眺めるだけで目眩がしそう。
なにしろ瑛司は有名国立大学を首席で卒業した秀才だ。

卒業すると大島グループの海外事業部に在籍して世界中を飛び回り、数々の事業を成功させた。五カ国語を操るといふから、英語も満足にできなかった私とは頭の作りが違いすぎる。

「ここだ。入れ」

瑛司は書齋を横切り、隣室に続く扉を開ける。

室内を覗いてみると、そこは寝室だった。

広い寝室に大きなベッドが鎮座している、それだけの簡素すぎる部屋だった。ベッドは寝起きのままにしているのか、布団が乱れている。

どうして寝室に案内するのだろう。

まさか……

時間のかかる重要な花嫁修業って、子作りするということ!?

皺の刻まれた純白のシーツを目にした私は臆した。

数歩下がると、瑛司の厚い胸板に背が付き、びくりとして肩を跳ねさせる。

まだ昼だし、さつき十年ぶりに再会したばかりだというのに、いくらなんでも性急すぎる。

「ちよつと瑛司、そんなことできないよ!」

慌てて抗議する私に、瑛司は傲然として言い放った。

「できないわけないだろう。子どもの頃、していたことだ」

「子どもの頃したのは添い寝だけでしょ。いやらしいことなんて一切していないじゃない」

「いやらしいこと? おまえは何を思い違っているんだ」

「え?」

慌てて距離を取ろうとした私は目を瞬かせる。

「俺はもう待てない。寝不足が限界だ」

「寝不足……?」

「俺は重度の不眠症でな。子どもの頃から寝付きが悪かったんだが、成長するにつれて重症になった。どうやら大島家は不眠症の家系らしい。父も不眠症なので、結婚したとき母はとても苦労したようだ。そこで大島家の嫁となるためには、俺を安眠させられることが絶対的条件になるわけだ」
大島家の花嫁として果たすべき重要な花嫁修業とは、不眠症の瑛司を安眠に導くという内容だったのだ。

確かに、不眠症を解消するというのは、ある程度の時間が必要な問題だ。

私は瑛司が使用したベッドへ目を向けた。

皺の刻まれたシーツは、何度も寝返りを打ったことを示している。枕は頭を擦りつけたためか、ぺちゃんこに潰れていた。眠れなくて、一晩中寝返りを打ち続けた跡のようだ。

「どうやら瑛司は、自分が不眠症であるということを、私に見せたかったらしい。」

「そういうことだったのね……。うん、眠れないのは困るよね……」

「恥ずかしい勘違いに気づいた私の頬が朱に染まる。」

「腕組みをした瑛司は、身を縮めた私を傲岸不遜な眼差しで見下す。」

「襲われるとも思ったのか？ まだ昼だぞ。いくらなんでも性急すぎるだろう」

「……」

「その通りですね。別に期待してたとか、そういうわけじゃないから。」

「瑛司のお父さんも不眠症だったんだね」

「そうだ。母も花嫁修業を行って、父の不眠症を克服させた。だが母の使用した方法は反則技だ。あれを使われては困る」

「一応聞くけど、どんな方法なの？」

「睡眠薬を仕込んだうえに、殴って気絶させるといやり方だった。その様子をこっそり窺っていた俺は、ああいう強引な女を嫁にしたくないと溜息を吐いたものだ」

「それって不眠症を克服したというより、力業でねじ伏せた形だよ……」

「瑛司はお母さんに似たんじゃないかな。」

「言われてみれば、瑛司は子どもの頃から寝付きが悪かった。お泊まりに来たときだけしか一緒に寝たことはなかったけれど、夜中にトイレに起きたあと、彼は何度も寝返りを打っていたことを覚えてる。ベッドから落ちたら危ないので、私のほうから、ぎゅつとしがみついていた。」

「そうすると瑛司はいつのまにか、すうすうと寝息を立てていたのだ。」

「子どもの頃、添い寝してくれただろう。瑞希と一緒に寝てくれたときは眠れたんだ」

「添い寝すれば眠れるの？ それじゃあ、ぬいぐるみとか……」

「いや。生身の人間でなくては駄目だ」

「じゃあ、瑛司の乳母さんとか……：：：気心の知れた人に添い寝してもらえば落ち着いて眠れるんじゃない？」

「……私も他人だけだ」

「おまえは別だ。だからこそ俺を快眠に導くという花嫁修業は、おまえ以外に務まらない」

「瑛司には、私に添い寝してもらえれば不眠症を克服できるという確固たる考えがあるようだ。」

「けれど……：：：子どもの頃ならともかく、大人になった瑛司と同じベッドでびったりくっつくなんて、私の封印した恋心が解き放たれてしまいかねない。」

「それだけは避けたい。」

「私は慌てて他の方法を模索することにした。」

「……」

「おまえは別だ。だからこそ俺を快眠に導くという花嫁修業は、おまえ以外に務まらない」

「瑛司には、私に添い寝してもらえれば不眠症を克服できるという確固たる考えがあるようだ。」

「けれど……：：：子どもの頃ならともかく、大人になった瑛司と同じベッドでびったりくっつくなんて、私の封印した恋心が解き放たれてしまいかねない。」

「それだけは避けたい。」

「私は慌てて他の方法を模索することにした。」

「……私も他人だけだ」

「おまえは別だ。だからこそ俺を快眠に導くという花嫁修業は、おまえ以外に務まらない」

「瑛司には、私に添い寝してもらえれば不眠症を克服できるという確固たる考えがあるようだ。」

「けれど……：：：子どもの頃ならともかく、大人になった瑛司と同じベッドでびったりくっつくなんて、私の封印した恋心が解き放たれてしまいかねない。」

「それだけは避けたい。」

「私は慌てて他の方法を模索することにした。」

「……私も他人だけだ」

「とりあえず不眠の程度を把握したいんだけど、一日の睡眠時間はどのくらい？」

「ゼロだ。一睡もできない」

よく見れば、瑛司の目元には青黒いクマが浮かび上がっている。

だが、さすがにゼロはないだろう。一睡もできないという不眠症の人の申告は、思い違いであることが多い。実際は数時間眠っているのに、眠れていないと思いつ込んでいるのだ。その緊張がまた不眠を呼ぶという悪循環に陥らせる。

「実際は少し眠れてるんじゃない？ 自分が気づいてないだけだよ。本当は二時間くらい寝てるんだと思う」

「そう言うなら、確かめてみる」

「えっ？」

「一晩中、俺を観察して、本当に眠れているのかどうか、その目で確かめると言っている」

この部屋で、瑛司と一晩中ふたりきり。

何かあるわけじゃないとわかっているけれど、私の胸は不安と期待のようなものが綱い交ぜになる。

うろろろと視線を彷徨わせる私に、瑛司は口端を上げて悪い男の顔を見せる。

「何かあるかと期待でもしてるのか？」

「そんなわけではないよ！」

「だったら問題ないだろう。身代わり花嫁として、まずは俺を安眠に導いてくれ。期待してるぞ」

瑛司の挑発にまんまと乗せられてしまった私は、渋々頷いた。



大島家を訪問した翌日、私はいつも通り職場へ出勤した。都内の企業に勤めるOLなのだ。

昨日はあのまま瑛司の部屋に泊まるわけにもいかなかったため、早々に父と一緒に帰宅した。父は私を花嫁代理にすることで当面の目処が付いたので、安堵していた。寝込んでいた母も、その報告を聞いて具合が良くなったようだ。ひとまず両親のことは安心だろう。

けれどその代わり、瑛司の不眠症を改善するという任務を与えられてしまった。

なんの対策も施さないまま瑛司が結婚したら、ますます不眠症に陥ってしまうかもしれない。それに瑛司のお母さんのように、姉が強引な手法で寝かしつけたりしたら大変だ。

ふたりの結婚のため……そう思うと、胸にちくりと痛みを覚える。だけど、私はそれを振り払うように頭を振った。

瑛司の健康のためなんだ。余計なことは考えないようにしないと。

まずは瑛司の不眠がどの程度なのか確かめなければならぬ。いずれまた大島家を訪れて、約束通り瑛司が眠れるかを見守る必要があるだろう。

気を取り直して、私は商品企画部のフロアに入室し、笑顔で挨拶する。

「おはようございます」

「おはよう、みずちゃん」

涼しげなブルーのアイラインを描いた肌をちらりと見せて挨拶してくれたのは、先輩の叶さんだ。私は仕事モードに頭を切り換える。

「おはようございます、叶さん」

叶さんは私が入社したときからの教育担当者で、しっかり者の綺麗なお姉さんといった雰囲気を感じている。彼女は男性社員の憧れの的だ。

「昨日、どうだった？ お姉さんの代わりに専務とお見合いしたんでしょ？」

さらりと剛速球を投げてくる叶さんに、私は頬を引き攣らせる。

「お見合いじゃありませんから！ 誤解です、誤解！」

「うちの会社にかかわることなんだから、詳しく聞かせてよ。みずちゃんの報告、楽しみにしてたのよ」

叶さんは優美に微笑んで、長い足を組み替える。

私の勤務する大島寝具は、大島グループの会社だ。私は商品企画部に在籍している。ちなみにコネではなく、きちんと入社試験を受けました。

そして瑛司は、この会社の専務なのだ。

幼なじみの瑛司が大島寝具の専務だったことは、入社してから気づいた。

それを知ったときは気まずいことになるかもという懸念があったけれど、全くの杞憂だった。

瑛司と会社で顔を合わせる機会ほとんどない。一般社員の私と御曹司の瑛司とは、同じ会

社にいたとはいえ何も接点がなかった。瑛司は海外の支店や現場に顔を出す機会も多いようなので、本社にはあまりいないらしい。

初恋……じゃなくて、幼なじみの相手と大人になってから会社で顔を合わせるの、なんとなく気恥ずかしいものだ。それが姉の婚約者となればなおさら。

私は『専務の婚約者の妹』という、なんとも遠い筋の人物なので、これまでは特に話題にされることもなく平凡な会社員生活を送ってきた。

ちなみに、叶さんを始めたすべての社員は瑛司を見知っている。もちろんあの俺様ぶりも有名だ。

さらに我が家が大島家の昔の家来で、姉と瑛司が許嫁であるという事実は、社員全員の知るところとなっていた。

私がうっかりして、叶さんにすべて話してしまったのだ。

というより、叶さんの巧みな話術によって次々と引き出されてしまったという方が正しい。だって天上の音楽のような声で「あら、みずちゃん。それはどういふことなのかしら。詳しく知りたいわ……」なんて耳元で囁かれたら、口がひとりでに開いてしまう。そして、誰にも言わないでくださいと私が念を押さなかったばかりに、麗しい声ですべての情報は流出してしまった。姉の代わりに大島家を訪ねるといふ予定についても、すでに叶さんに話していた。魔性の力には逆らえませぬ。

でも、花嫁代理のことまで話すわけにはいかない。その先の寝室のことに話が及べば、叶さんに

あらぬ疑いをかけられてしまうかもしれないからだ。

私は平静を装って、さらりと報告した。

「姉が海外から戻ってこないで、謝りに行っただけですよ」

「それだけ？」

「はい、それだけです」

「みずちゃん、嘘が下手ね。辣腕で知られる大島専務がそれだけで済ませるわけがないわ」

にっこり微笑む叶さん。なぜか彼女には、誤魔化しは通用しない。狼狽えた私は目を泳がせる。助けを求めるように視線を斜めにやると、出勤してきた主任の東堂さんに爽やかな微笑を向けられた。

「僕もその話は詳しく聞きたいなあ。なにしろ、守谷さんはいずれ専務の義理の妹になるんだからね。そうなったら僕の上司になっちゃうかも」

物腰の柔らかい東堂さんは、スーツの似合う、すらりとした好青年だ。

女子社員の絶大な人気を誇るけれど、彼女はいいない。

仕事が恋人だから、と彼は常に言っているが、私は東堂さんの趣味が原因ではないかと密かに思っている。

東堂さんの趣味は、昼寝。休日は自社製品に包まれて至福の時間を過ごしているのだそう。

「そんなわけじゃないですよ！ 義理の妹だなんて、気が早いです」

「そうかなあ。だって、守谷さんのお姉さんと専務は生まれたときから婚約者なんですよ？」

「……よくご存じですね」

「守谷さんが教えてくれたんじゃない。子どもの頃はお姉さんと一緒に大島家にお泊まりしたとかね」

「私、そんなことまで言いましたか!？」

「掛け軸を壊したお姉さんの代わりに謝ったところまで聞いたね。専務が庇ってくれたんだよね。」

ねえ、叶さん？」

私の黒歴史が、ただ漏れである。教えてあげたというか、叶さんの魔力により広まったというほうが正しい。

東堂さんに話を振られた叶さんは、流行色の口紅を引いた唇に弧を描く。

「その通りですわ、東堂主任。でも、昨日はさらなる進展があつたようですよ」

「とうとう?？」

「みずちゃんの頬が薄らと染まっていますから、なんらかの艶めいた展開があつたんじゃないかしら。ねえ、みずちゃん？」

叶さんの指摘が鋭すぎる。

でも、とても艶めいた展開と言えるようまできごとではないのだけれど。

叶さんと東堂さんという、ふたりの猛獣……ではなく、美形に視線を注がれ、私は小動物のごとく硬直した。

さすが商品企画部の双壁と謳われるふたりだけあって、目力も強力極まりない。

「いえ、あの、それがですね……」

どうにか上手く説明しようと焦るけれど、狼狽^{うろた}えるばかりで言葉が出てこない。

そのとき、フロアにいた社員たちが、一斉に同じ方向に目を向けた。

「瑞希。いるか」

圧倒的な存在感の登場に、みんなは手を止めて、素早く起立する。

出遅れてしまい、茫然としている私のデスクに、堂々とした足取りで瑛司はやってきた。

「昨日はなぜ逃げ帰った。俺と一晩過ごすことに同意しただろう」

朗々とした声が朝のフロアに響き渡る。

静寂が、痛い。

今の台詞^{セリフ}……絶対誤解されたよね？

朝から会社で何言ってるの、この人？

くらりと目眩^{めまい}を起こした私に構わず、瑛司は言葉を重ねた。

「今夜は逃がさないぞ。終業時間まで待つてやる。車を回すから勝手に帰るなよ。それまで心構え

でもしている」

「あのっ！ 誤解のないよう専務に申し上げておきますが！」

もう我慢できない。

私はフロア全体に響き渡る大声をお腹から出した。

「専務の不眠症を克服するために！ 私が睡眠の様子を見守るというお約束ですね！ 心得まし

た！」

私の声がフロアに反響する。そしてまた静寂。

誰も身じろぎすらしない。

瑛司は不機嫌そうに眉をひそめた。

「そんなに大声を出さなくても聞こえている。初めから、そう言っているだろう」

「……」

そうかな？

瑛司の誤解を招く言い方は故意としか思えないんですけど。

ここで、柔和^{にやわ}な笑みを浮かべた東堂さんが、ようやく救いの手を差し伸べてくれた。

「それじゃあ、守谷さんは今日は残業なしね」

「え……はい。ありがとうございます」

隣の叶さんも美麗な笑みを見せながら応援してくれる。

「専務との一晩、楽しく過ごしてね。明日の報告も楽しみにしているわ」

「はあ……」

ふたりとも、なぜか楽しそう。

それを聞き、瑛司はおおらかに両腕を広げた。

「優秀な人材に囲まれて最高だ。それでは諸君、業務に入ってくれ」

「はい、専務！」

綺麗に揃った返答をした社員たちは、私から気まずそうに視線を逸らしながら着席した。

釈然としないまま、一日の業務が終了した。

瑛司が商品企画部のフロアを訪れて以降、他の社員が私に触れないように気を遣っていたのは言うまでもない。東堂さんと叶さんは、いつも通り悠々としていたけれど。

東堂さんに、残業なしで早々にフロアから追い出された私はエレベーターに乗り込む。

昨日は逃げ帰るように父と一緒に帰宅してしまったので、瑛司はそれが不満だったようだ。

「不眠症を一日も早く治したいという気持ちもわかるけどね……」

とにかく、これ以上瑛司に日常を掻き回されないためにも、一刻も早く彼の不眠症を改善しよう。それが私に与えられた花嫁修業なのだから。

けれど、迷惑なそぶりをしながらも、本当は少し喜んでいる私が出た。

子どもの頃から密かに憧れていた瑛司と、こうしてまた会って、気兼ねなく話すことができるから。

やっぱり遠い世界の人だから、もうこんな機会は訪れないと思っていた。

私は胸の奥底から湧き上がりそうになる喜びを、そっと押し込める。

瑛司は姉さんとの結婚のために、代理として私に花嫁修業を申しつけているのだ。勘違いしてはいけない。私は、姉の身代わりなのだから。

エレベーターが到着したので、私は手荷物を抱え直してホールへ出る。

それにしても、寝具メーカーなのに専務が不眠症だなんて皮肉なことだ。瑛司の健康のためにも、会社のためにも、ぜひとも安眠させてあげたい。

決意も新たに、軽い足取りで会社を出る。すると、並木道の街路に仁王立ちになっている人物を発見して、思わず足を止めた。

「何してるの、瑛司……」

「愚問だな」

そうでした。車を回すから待っているとかなんとか言っていましたね。

黒塗りの高級車と白手袋を着用した運転手を傍に待機させ、こちらを睨みつけている瑛司からは貫禄が溢れすぎている。

道行く人々は私たちにかかわらないように、距離を取って足早に去って行く。

「逃がさないぞ。さあ、俺と来い」

大股で歩み寄った瑛司は私の手を、すいと掬い上げると、胸の辺りにやや高く掲げながら車まで引き添ってくれた。

まるで紳士が淑女をエスコートするような仕草に、どきんと胸が弾んでしまう。

言葉はきつい瑛司だけれど、所作は丁寧で優しいものだから、そのギャップに戸惑うのだ。車の傍まで来ると、専属の運転手さんが懇懇にドアを開けてくれた。

「お荷物は後ろに入れましょうか？ 瑞希様」

「あ、はい。お願いします」

今日はいつもの鞆の他に、不織布ふしょくふの大きなバッグを持っていた。家出でもするのかと思われるような大きさだけれど、中身は軽いので持ち歩くのにさほど苦はない。

瑛司が私の手を放さないので、仕方なく空いたほうの手で運転手さんにバッグを預けた。運転手さんはトランクを開けて、受け取ったバッグを積んでくれる。

「なんの荷物だ。大事なもののなか？」

車に乗り込もうとすると、瑛司はなぜか私の頭の上に掌てのひらを翳かざした。

なんだろうと思えば、上部の車の枠に頭をぶつけないよう、カバーしてくれたらしい。そそっかしいせいかな、よくここに頭をぶつちゃうんだよね。

瑛司のおかげで無事に座席に座ることができた。瑛司は私の隣に腰を下ろす。

「快眠のために必要なものが入ってるの」

「道具など使っても無駄だと思うがな」

「ええ？ だって不眠症を克服したいんだよね？」

「俺の不眠症を甘く見るな」

まるで眠ったら負けとでも言いたげな瑛司の不遜な発言に、苦笑いが零こぼれる。

やがて運転手さんがドアを閉めると、私と瑛司を乗せた車は、大島家のお屋敷へ向かってゆつくりと滑り出した。

「絶対に、瑛司を眠らせてあげるから」

「ほう……。期待している」

瑛司は、にやりと口端を上げた。

それはまるで何事かを企たくらんでいるような悪い男の顔で、私はつい見惚れてしまっていた。

しばらくして、私たちを乗せた高級車は閑静な住宅街に辿り着いた。

壮麗な門をくぐれば、広大な大島家の敷地が広がる。屋敷前やしきまへにある車寄せに停車すると、玄関前にはお仕着せを纏まとう使用人が控えていた。

「お帰りなさいませ、瑛司様」

「ああ、今帰った」

車のドアを開けた老齢の男性は、執事の藤田ふじたさんだ。子どもの頃、お屋敷に遊びに来たときから藤田さんは大島家に仕えていたので見知っている。

反対側のドアを開けようとして、私は慌てて手を引いた。自分で車のドアを開けるのは、ここではマナー違反なんだよね。お父さんと訪問したときもこんな歓待を受けたけれど、未だに慣れない。

瑛司は毎日のことらしく、平然として車を降りている。そして彼は車外から私に向けて、掌てのひらを広げてみせた。犬に『お手』しなさいと求める飼い主のポーズのようだ。

私はどうしたのかと首を傾げる。

「瑞希。手を」

「はい」

私は素直に『お手』をしてしまったけれど、瑛司に繋いだ手を掲げられて気がついた。またエスコートしてくれるんだ。

勘違いしてしまった自分が恥ずかしくて、頬が朱に染まる。

大島家のお屋敷はまるで大使館と見紛うばかりの立派な邸宅だ。先回りした藤田さんが開けてくれた重厚な玄關扉をくぐれば、ホールには豪華なシャンデリアが煌めいている。

「あ、そうだ。私のバッグ」

トランクに入れたバッグを忘れてきてしまった。振り返ると、すでに運転手さんは私のバッグを取り出している。

「荷物は使用人に任せろ。彼らの仕事だ」

「でも、自分の荷物なのに……」

会社では自分の物はもちろん、率先してプレゼンテーション用の資料などの荷物を運んでいる。

私ももずつと年配の人に荷物を持たせるだなんて申し訳なく思ってしまう。

けれど瑛司は私の手を放そうとしないので、取りに戻ることもできない。

バッグを抱えてきてくれた藤田さんは、にこやかな笑みを浮かべた。

「瑞希様。どうぞわたくしにお任せください。これでもまだまだ力はあるのです。年寄り扱いしないでくださいよ」

優しい言葉をかけられて、私の口元に笑みが零れる。

「ありがとうございます、藤田さん。では、お願いします」

そう言うと、瑛司は眉間に皺を寄せる。

「礼を言う必要はない。彼らは使用人で、おまえはその主人だ。立場を弁えろ」

「藤田さんの主人は瑛司でしょ？」

「おまえは俺の嫁……代理だぞ。主人と同等の地位だ。主らしく堂々としている」
ここでは私も瑛司と同じ立場として扱われるんだ。

花嫁代理として、相応しい振る舞いをしなければならぬ。

でも上流階級の作法なんて、庶民の私にすぐに身につけられるわけがない。

「わかりました。だんなさま」

皮肉を込めて『だんなさま』を強調する。

すると、ぴくりと瑛司の眉が跳ね上がった。彼はなぜか咳払いを零している。

いずれ瑛司は大島家の家督を継いで、みんなから『旦那様』と呼ばれる立場になる。

そんなに驚くことではないと思うのだけれど。

「……食事の用意ができています。今夜はおばあさまと両親は不在だから、ふたりだけの夕食会だ」

夕食会という響きに、上流階級の華やかさを感じてしまう。

そうして案内された食堂は、お城かと錯覚するほどの広大な部屋だった。

深緑の壁紙に彩られた室内には暖炉があり、大きな窓からは庭園が一望できた。大理石と思しき長いテーブルには、精緻な細工が施された椅子が整然と並べられている。椅子は全部で三十脚もあった。実家にある四人掛けのダイニングテーブルしか知らない私は、目を瞬かせる。

「どうしてこんなに椅子があるの？ 大島家の家族は十和子おばあさま、瑛司のご両親、あと瑛司の四人じゃない？ あ、もしかして藤田さんたちを入れると三十人なのかな」

そう言うと、瑛司に呆れた視線を投げられる。

「使用人は使用人専用の食堂で食事を摂る。ここは来客を迎えたときの晩餐会にも使われるから、椅子の数を揃えてあるんだ」

「そうなんだ……お客様用のね」

使用人専用の食堂だとか、晩餐会だとか、またしても庶民とはかけ離れた単語の羅列に目眩を起しそうになる。

瑛司はテーブルセッティングが施された席に私を連れて行くと、そこでようやく繋いでいた手を解放した。

テーブルには、精緻な模様の皿の上に、王冠型に折られたテーブルナプキンが置かれていた。その周囲には、銀色に輝くカトラリーがずらりと並べられている。こんなに食器を使ったら、洗うのが大変じゃないかなと思ってしまう。

瑛司は椅子を引いて、そこに座るよう促してきた。

「さあ、座れ。俺の花嫁」

彼の口調には全く茶化した部分が見当たらない。大真面目にそんな台詞を吐かれたら、こちらが赤面してしまう。花嫁に、代理と付けるのを忘れているけれど。

私が腰を下ろそうとすると、瑛司は絶妙なタイミングで椅子を押してくれた。

そして瑛司も向かいのセッティングされた席に着く。彼の椅子は藤田さんが引いてくれていた。

えっと……テーブルマナーは、外側のフォークとナイフから使うんだよね。

膨大な量の食器を前にした私は、必死にマナーを思い返す。

「アペリティフはキールロワイヤルだ。酒は飲めるか？」

「少しなら」

アペリティフは食前酒の意味だったかな。

給仕さんの手から、小さなクリスタルグラスに入ったお酒を提供される。ピンク色のキールロワイヤルは、カシスで色付けしたシャンパンだ。

お酒はあまり飲めないけれど、グラスは私の掌に収まるくらい小さいものなので、この量なら平気だろう。

瑛司はグラスを掲げた。私もそれに倣う。

「俺の快眠に、乾杯」

「かんぱーい……」

さりげなく花嫁修業を示唆されて、私は頬を引き皺らせながらグラスを口元に運ぶ。

まるやかな食前酒はとても飲みやすい。

その後、豪華な料理が運ばれてきた。

大島家の専属シェフが腕によりをかけたという、フランス料理のフルコースは絶品だった。

貝のジュレとクリームにキャピアをのせて。温かいスープ・ドウ・ポワソン。フォアグラのテ

リーヌに果物を添えて。メインは牛肉の赤ワイン煮込み。

高級食材が惜しげもなく使用された手の込んだメニューは、どれも初めて食べる味だ。忙しいときはカップラーメンで済ませている私の舌は、感嘆の連続である。

ゆるりとワイングラスを回している瑛司は、感動に身を震わせている私に問いかけた。

「料理はどうだ？ 有名レストランから引き抜いたシエフだから、味は確かなはずだ」

「すごい……美味しい……すごい」

あまりの美味しさに語彙が消失してしまう。

美味しいとか、まずいとか、もはやそういうレベルではない。

私の五感が天上の世界を感じる。

「瑛司は毎日こんなに美味しいものを食べてるんだね。いつも感激できちゃうんじゃない？」

「これが日常だから、感激するということはないな。家ではひとりで食事を摂ることがほとんどだ。仕事のことを考えながら食べているときは、何を口にしたのか覚えていない」

いつも、ひとりなんだ。

どんなに豪華な食事でも、ひとりで食べるのは寂しいんじゃないかな。

私は手にしていたカトラリーを置いて、瑛司に笑顔を向けた。

「でも今日は私がいるから、仕事のことは考えていられないでしょ？」

瑛司は笑みを零した。それは嫌味のない、澄んだ微笑だった。

「そうだな。おまえがいてくれるせいか、今日の夕食は美味しく感じられる。なにしろ食べるたび

に、『美味しい、すごい』と喜んでくれるんだからな。夕食会に招いた甲斐があったというものだ」
無邪気にはしゃいでしまった私は顔を赤らめる。

「だって本当に美味しいんだもの……。私の得意料理と比べたら天地の差だよ」

「ほう。一応聞いておいてやるが、おまえの得意料理とはなんだ？」

表情を改めた瑛司は、真摯な眼差しをして問いかけた。彼がテーブルに置いたワイングラスの液体が揺れる。

一応というわりには、なぜか真剣だ。そんなに注目するようなことだろうか。

シエフの素晴らしい料理を前にして、「私の得意料理は煮崩れた肉じゃがです」とは言いづら

い。
私は目線を泳がせた。

「えっと……内緒」

「……なんだと」

瑛司は驚愕の表情を浮かべる。秘密にされたことが相当ショックだったらしい。私の得意料理が何かなんて、取るに足りないことだと思っけれど。

「ヒントをくれ。家庭料理か？」

瑛司は、なぜか焦ったように食い下がってきた。問いは的を射ているので、私は頷いた。

瑛司は悩ましげに首を捻っている。

「もつともわからない分野だな……。カレーとシチューしか思い当たらない」

「残念。どつちも違うよ」

「俺が食べたことのある料理か？ いや、ないだろうな。離乳食からシエフが作ったものを食べているからな。瑞希の作る手料理か……気になるな」

ふわりとしたデザートのスフレを掬い上げていた私は、手を止めた。

彼は、お母さんが作る家庭料理というものを食べたことがないんだ。

生まれたときからお金持ちの御曹司で、何不自由なく育てられた。才能や容姿にも恵まれた瑛司は、これまで手に入らないものなどなかったろう。

けれど、グループ会社を経営する多忙な両親は瑛司の世話を使用人に任せていたようなので、彼は家庭の愛情に飢えているのではないだろうか。

瑛司のことだから、それも環境を考えれば当然だと受け止めていそうだけれど……

「いつか、瑛司に作ってあげるよ。私の得意料理」

「本当か!？」

目を見開いた瑛司は期待を込めた瞳で私を見つめる。

私は微笑を零しながら頷いた。

なんだから、すぐ期待されちゃつてるみたい。

「そうか……楽しみだな。そのとき俺は、今日の瑞希のように感動するだろう」

「感激できるような味じゃないと思うよ。別の意味で驚くかもしれないけど」

その日が訪れるかどうかはわからないけれど、いつか、瑛司に食べてもらいたいな。

崩れた料理なんて瑛司は見たことがないだろうから、せめてそうならないよう、練習しておこう。私はひっそりと心に誓った。

ふたりきりの豪華な夕食会を終えたあと、メイドさんに「お風呂のご用意ができております」と伝えられた。

今晩はお屋敷に泊まることになる。おそらく瑛司の寝室に。

といても、私は不眠症の改善のために訪れたわけなので、瑛司の就寝の様子を見学するだけだ。他に何事もあるわけがない。過剰に意識していれば、また鼻で嗤われそう。

ありがたいとお風呂を頂戴した私は、用意してもらった着心地の好いバスローブに身を包んだ。メイドさんが丁寧な所作で、足元にスリッパを差し出してくれる。

「それでは瑞希様を離れにご案内いたします」

「は、はい。お願いします」

ここは母屋なので、瑛司がいる離れまで連れて行ってくれるらしい。ひとりで行けますけど……メイドさんは恭しく私の手を取り、やや掲げる。そして腰を低くしながら私を導くように歩いた。転ばないように気をつけてくれるんだ。

まるで、お姫様になったみたい……

「瑛司様より、お支度は必要ないと承っております」

「あの、支度は必要ないってというのは、どういうことですか？」

もうお風呂に入って髪も乾かしたので、支度は終わっていると思うのだけれど。

メイドさんは私を直視しないよう、廊下に視線を落としながら答える。

「花嫁様としての初夜のお支度のことでございます。今日のところは不要であるという、瑛司様よりのお達しです」

「……そ、そうですか」

メイドさんのプロフェツショナルぶりに、くらくらしてしまう。

お金持ちの家に勤めるお手伝いさんというと、近所のお婆さんのような人柄を想像してしまうけれど、大島家の使用人は私のイメージを遙かに超越しているようだ。まるで江戸時代の藩主に仕える女中さんみたい。もともと大島家は、昔は藩主の家柄だったのだけれど。

御影石を踏みながら、明かりの中に浮かび上がる離れに向かう。到着すると、メイドさんは膝をついて書斎の扉をノックした。

「失礼します、瑛司様。瑞希様をお連れいたしました」

「入れ」

室内から瑛司の短い返答が届いた。音もなく扉を開いたメイドさんは土下座する勢いで顔を伏せている。

「あのう……顔を上げていいと思います」

「とんでもございません。どうぞ、瑞希様、お入りくださいませ」

そうか、私が入室しないと、彼女は顔を上げられないんだ。

そろりと部屋へ足を踏み入れると、背後の扉が、すうっと閉められた。

机に向かって読書していた瑛司は、本を閉じて立ち上がった。彼もお風呂に入ったらしく、私と同じバスローブ姿だ。

「体は冷えなかったか？ 離れにも風呂はあるんだが、こちらには掃除以外でメイドを立ち入らせないことにしているからな」

戸口に立つ私の傍までやってきた瑛司に、顔を覗き込まれる。お風呂上がりなので、私の体はまだ充分に温まっていた。

「大丈夫。そういえば、メイドさんに、お背中をお流ししますって言われたから必死で断ったよ」

「なぜ断る？」

瑛司は体温を確かめるように、指の背でそっと私の頬をなぞった。

熱い指先に、鼓動がどきりと跳ねる。顔を近づけた瑛司の髪は少し濡れていた。その濡れた毛先が、私のこめかみを辿ると、少しくすぐったい。

「入浴中に服を着たままのメイドさんに入ってこられたらびっくりするよ」

「ほう……そういう感覚なのか。俺も今は自分で洗うが、女性は大人になってもメイドにやってもらうものだと思っていた」

そういえば泊まりに来た子どもの頃、広大な母屋のお風呂場で私と姉はメイドさんに体を洗ってもらったことがある。あのときはお母さんが洗ってくれるのと同じようなものと思い、受け入れられたけれど、どうしてメイドさんは一緒にお風呂に入らないのかなと不思議に思っていた。

瑛司も子どものときはそうしてもらっていたから、それが常識だと思っているのだ。

「そんなのお金持ちの家だけのことだよ……。ほとんどの人は自分の体は自分で洗うよ」

「世間一般の常識は置いておけ。いい機会だから命じておく。おまえは俺の花嫁だ。俺の花嫁が自分で体を洗うことは許さない」

瑛司の言い分に、私は目を瞬かせた。

「なんだか独自の俺様ルールができ上がっているようなのだけれど。」

「花嫁代理でしょ？」

一応その部分を訂正すると、瑛司は自分の間違いに気づいたのか、はっとして視線を逸らした。

「そうだったな。とにかく次回からは、離れの風呂を使え。母屋から移動して風邪でも引いたら困る」

次回もあるという前提らしい。確かに不眠症の解消には時間がかかるものだろうけれど。

「いいけど。ここのお風呂でメイドさんに体を洗ってもらえということ？」

「いや。おまえもメイドに洗われるのは抵抗があるようだし、さつきも言ったが俺はプライベートな場所に掃除以外でメイドを入れないことにしている」

「ということは？」

自分で体を洗ってはいけない。メイドさんには洗ってもらわなくていい。

そうすると、どうすればいいのだろうか。瑛司が何を言いたいのかわからない。

すると、頬をなぞる瑛司の指が、するりと首筋を辿り落ちていく。

「俺が洗う。当然だろう」

「……当然じゃないよ」

不遜に告げられ、驚きを通り越して呆れてしまう。

メイドさんでも抵抗があるのに、瑛司に洗ってもらうなんて、想像しただけで恥ずかしい。

「何を恥ずかしがる必要がある。俺の花嫁を体の隅々まで愛でるのは当たり前だ」

「花嫁代理ね」

堂々と吐かれる羞恥を煽る台詞は、聞いているこちらが恥ずかしくなる。

間違いに気づいたのだろう、瑛司は睫毛を瞬かせた。

「ああ……まあ、細かいことはいい。俺は花嫁の体を洗うことを、決して譲らない」

もはや訂正する気も失せた私は溜息を零す。

その固い決意の源はなんだろう……

傲岸不遜で俺様で、そのうえ強情。本当に困った旦那様だ。

「強情だね。世の中の旦那様は奥さんの体を洗うと決まってるわけじゃないんだよ？」

「世間の統計なぞ関係ない。諦めて俺に身を委ねろ」

「瑛司に体を洗ってもらうのは、ちょっと……。誤解のないように聞いておくけど、洗うのは背中だよね？」

背中だけなら譲歩しようかなと、ちらりと思い描いた私を獐猛な双眸が見下ろす。

「背中も洗う部位に入っているな」